

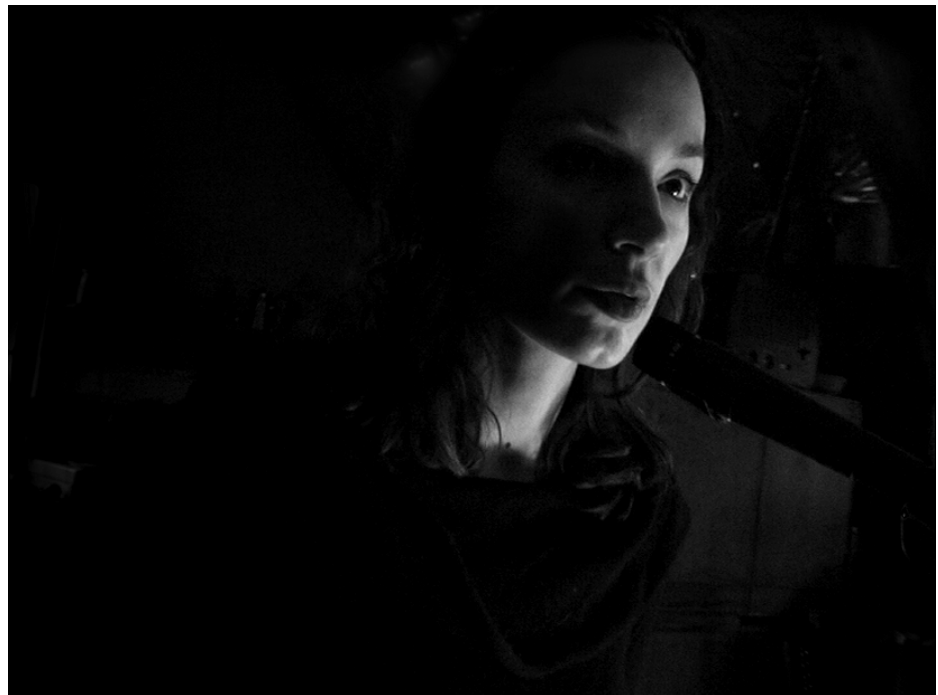
# 何も変えてはならない

ペドロ・コスタ監督作品

ジャンヌ・バリバール主演

## NE CHANGE RIEN

2009年／ポルトガル・フランス／103分／35mm／モノクロ／1:1.33／ステレオ



2010年7月31日、ユーロスペースにてロードショー！

公開を記念し、7月24日（土）より「ペドロ・コスタ特集上映」もユーロスペースにて開催決定！

ジャンヌ・バリバール6月下旬来日決定！ ペドロ・コスタ監督公開時来日予定

｜ 配給・お問い合わせ ｜

シネマトリックス

新宿区愛住町22第3山田ビル6F Tel: 03-5362-0671 Fax: 03-5362-0670

｜ 宣伝・お問い合わせ ｜

カブリコンフィルム

吉川 Tel: 080-5095-3500

**E-mail:** [costa@cinematrix.jp](mailto:costa@cinematrix.jp)

公式サイト: [www.cinematrix.jp/nechangerien](http://www.cinematrix.jp/nechangerien)

# 何も変えてはならない | ペドロ・コスタ監督作品

NE CHANGE RIEN

2009年 / ポルトガル・フランス / 103分 / 35mm / モノクロ / 1:1.33 / ステレオ

監督：ペドロ・コスタ 撮影：ペドロ・コスタ

編集：パトリシア・サラマーゴ 録音：フィリップ・モレル、オリヴィエ・ブラン、ヴァスコ・ペドロソ 音

楽：ピエール・アルフェリ、ロドルフ・ビュルジェ、ジャック・オッフエンバック

製作：アベル・リベイロ・チャベス

出演：ジャンヌ・バリバル、ロドルフ・ビュルジェ、エルヴェ・ルース、アルノー・ディテリアン  
ジョエル・テウー



©VALERIE MASSADIAN

— ペドロ・コスタとジャンヌ・バリバル、ふたつの魂が響き合う  
奇跡のコラボレーション

鮮烈な日本公開となった『ヴァンダの部屋』、  
驚きと感動をもって迎えられた『コロッサル・ユース』から2年。  
ポルトガルの俊英が、友情と敬愛をもってフランス人女優ジャンヌ・バリバルの歌手活動を記録した、これまでにない至高の音楽ドキュメンタリーが誕生。  
2009年のカンヌ国際映画祭を始め、世界各地の映画祭で好評を博した本作は、ペドロ・コスタ監督とジャンヌ・バリバルが紡ぐ密やかな愛の唄である—

何も変えてはならない、  
すべてが変わるために・・・

## |解説|

### 自由に生きる女性の、美しき肖像

『そして僕は恋をする』(アルノー・デプレシャン) や『恋ごころ』『ランジェ公爵夫人』(ジャック・リヴェット)などに主演し、若手から巨匠まで現代フランスにおける映画作家たちのミューズとして知られるフランス人女優ジャンヌ・バリバール。歌手としても知られるバリバールの音楽活動の軌跡を、『ヴァンダの部屋』『コロッサル・ユース』で世界中の気鋭の映画作家たちやアーティストたちを刺激し続ける、今最も注目を集めるポルトガルの鬼才ペドロ・コスタが独自の視点で映画にした。

ライブリハーサルやアルバムレコーディング、ロックコンサートや歌のレッスン、曲は《ジョニー・ギター》からオフオープンバックの《ペリコール》まで、そして舞台をフランスのサンマリー・オーミーン村の屋根裏部屋から東京のカフェへと移しながら、ひとりの女優の持つ様々な表情を、ペドロ・コスタがモノクロの美しく力強い映像で見事に捉える。5年にわたり撮影され、完成した本作を見たバリバールは、「私のポートレート以上」とのコメントを寄せている。

原題の「NE CHANGE RIEN」(何も変えてはならない)は、ジャン＝リュック・ゴダール『映画史』からの引用で、『何も変えてはならない』においても、サンプリングされたゴダールの声を聞く事ができる。ゴダールはこの言葉を、ロベール・ブレッソンの「シネマトグラフ覚書」から引用している。

カンヌをはじめ、マドリッド、ニューヨーク、モントリオール、トリノ、ロッテルダムなど各国映画祭で上映され、好評を博し、2010年夏、待望の日本公開が決定した。



## [フィルモグラフィ]

**Cartas a Júlia** (ジュリアへの手紙)

(1987年/短編)

**血 O Sangue**

(1989年/35mm/スタンダード/95分)

1989年ヴェネチア国際映画祭出品

1990年ロッテルダム国際映画祭国際批評家連盟表彰

1990年アヴェイロ・ポルトガル語圏映画祭グランプリ

**溶岩の家 Casa de Lava**

(1994年/35mm/ビスタ/110分)

1994年カンヌ国際映画祭「ある視点」部門出品

1994年テサロニキ国際映画祭最優秀芸術貢献賞

1994年ベルフォール国際映画祭最優秀外国映画賞

**骨 Ossos**

(1997年/35mm/ビスタ/94分)

1997年ヴェネチア国際映画祭金のオゼッラ賞(撮影賞)

1997年ベルフォール国際映画祭審査員特別賞

**ヴァンダの部屋 No Quarto da Vanda**

(2000年/35mm/スタンダード/178分)

2000年ロカルノ国際映画祭出品

2001年山形国際ドキュメンタリー映画祭最優秀賞・国際批評家連盟賞

2002年カンヌ国際映画祭フランス文化賞最優秀外国映画作家

**映画作家ストロブ=ユイレ あなたの微笑みはどこに**

**隠れたの？**

Danièle Huillet, Jean-Marie Straub Cineastes-0à Git

Votre Sourire Enfoui?

(2001年/35mm/スタンダード/102分)

2001年ヴェネチア国際映画祭出品

**6 Bagatelas (六つのバガテル)**

(2002年/ビデオ/18分)

『映画作家ストロブ=ユイレ あなたの微笑みはどこに隠れたの？』のポルトガル版DVDに収録された作品

**The End of Love Affair**

(ジ・エンド・オブ・ラブ・アフェア)

(2003年/ビデオ/7分)

ポルトガル人コレオグラファー、ジョアン・フィアディオを撮影した実験的作品

**Ne change rien** (何も変えてはならない)

(2005年/ビデオ/13分)

**コロッサル・ユース Juventude em Marcha**

(2006年/35mm/スタンダード/155分)

2007年カンヌ国際映画祭出品

**The Rabbit Hunters** (うさぎのハンターたち)

(2007年/ビデオ/23分)

2007年韓国・チョンジュ国際映画祭製作・上映、3人の作家によるデジタル・ムーヴィー『Memories』の中の一編

**Tarrafal** (タラファル)

(2007年/ビデオ/16分)

2007年カンヌ国際映画祭出品、5人の作家による

『O Estado do Mondo』の中の一編

**何も変えてはならない**

(2009年/35mm/スタンダード/103分)

2009年カンヌ国際映画祭出品

2009年マドリッド国際映画祭出品

2009年ニューヨーク国際映画祭出品

2009年マルセイユ国際ドキュメンタリー映画祭出品

2009年モントリオール世界映画祭出品

2009年ロッテルダム国際映画祭出品

2009年トリノ国際映画祭出品

2010年チョンジュ国際映画祭出品

## ペドロ・コスタ Pedro Costa

1959年ポルトガルのリスボン生まれ。リスボン大学で歴史と文学を専攻。青年時代には、ロックに傾倒し、パンクロックのバンドに参加する。国立映画学校に学び、アントニオ・レイスに師事。ジョアン・ボテリオ、ジョルジュ・シルヴァ・メロらの作品に助監督として参加。1987年に短編『Cartas a Julia (ジュリアへの手紙)』を監督。1989年長編劇映画第1作『血』を発表。以後『溶岩の家』(1994)、『骨』(1997)でポルトガルを代表する監督のひとりとして世界的に注目される。その後、少人数のスタッフにより、『骨』の舞台になったリスボンのスラム街フォンタイニャス地区で、ヴァンダ・ドゥアルテとその家族を2年間にわたって撮影し、『ヴァンダの部屋』(2000)を発表、ロカルノ国際映画祭や山形国際ドキュメンタリー映画祭で受賞した後、日本で初めて劇場公開され、特集上映も行われた。『映画作家ストロブ=ユイレ あなたの微笑みはどこに隠れたの？』(2001)の後、『コロッサル・ユース』は、『ヴァンダの部屋』に続いてフォンタイニャス地区を撮り、カンヌ映画祭他世界各地の映画祭で上映され、高い評価を受けた。山形国際ドキュメンタリー映画祭2007には審査員として参加。最新作は女優ジャンヌ・バリパールの音楽活動を記録した『何も変えてはならない』。

QuickTime® 7  
このファイルは、Apple によって作成された  
QuickTime™ フォーマットでエンコードされています。

## ジャンヌ・バリバル Jeanne Balibar

1968年パリ生まれ。哲学者の父エティエンヌと物理学者の母フランソワーズの間に生まれる。フロラン演劇学校、次いで国立演劇学校で学び、1993年、アヴィニオン演劇祭でのモリエール「ドン・ジュアン」の舞台での演技が賞賛され、コメディイ・フランセーズに加入、(1997年に脱退)。『魂を救え！』(1992 アルノー・デプレシャン)で映画に初出演し、続く『そして僕は恋をする』(1996 デプレシャン)でミステリアスなヒロインを好演する。デプレシャン作品の後、オリヴィエ・アサイヤス、ジャン＝クロード・ピエット、マチュー・アマルリック、ブノワ・ジャコラの作品に次々と出演し、フランスの作家主義的な映画作家のミュージズとして欠かせない存在になる。また『神のみぞ知る』(1998 ブリュノ・ボダリデス)に見られるように、シリアスな役だけでなく、コミカルな役も得意とする。近年はジャック・リヴェットやラウル・ルイスら巨匠の作品にも出演し、国際的な注目を集める。また2003年に「Paramour」を発表し、歌手デビューを果たす。最新作は、自身の音楽活動を記録した『何も変えてはならない』(2009 ペドロ・コスタ)。

### 【フィルモグラフィ】

#### 魂を救え！\*

(1992年 アルノー・デプレシャン)

#### パリの日曜日

(1994年 エルヴェ・デュアメル)

#### 美しきバヴェル

(1994年 ルー・ジュネ)

#### 優しい狂気

(1994年 フレデリック・ジャルダン)

#### アンヌ・ピュリダンの十字架

(1995年 ジュディス・カーエン)

#### 不正取引

(1995年 ジョセ・ダヤン)

※TV シリーズ「ジュリー・レスコー」の一編

#### スティル氏の犯罪

(1995年 クレール・ドゥヴェール)

#### そして僕は恋をする\*

(1996年 アルノー・デプレシャン)

#### 私は恋愛恐怖症

(1997年 ロランス・フェレイラ・バルボサ)

#### スープをお飲み

(1997年 マチュー・アマルリック)

#### 神のみぞ知る

(1998年 ブリュノ・ボダリデス)

#### バルザック

(1999年 ジョセ・ダヤン)

※TV 作品

#### 8月の終わり、9月の始め

(1999年 オリヴィエ・アサイヤス)

#### 川に架かる三つの橋

(1999年 ジャン＝クロード・ピエット)

#### 発禁本・SADE\*

(2000年 ブノワ・ジャコ)

#### 無邪気の喜劇

(2000年 ラウル・ルイス)

#### 明日は明日の風が吹く

(2000年 ジャンヌ・ラブリュヌ)

#### インティミスト

(2001年 リシア・エミネンティ) ※短編

#### 恋ごころ\*

(2001年 ジャック・リヴェット)

#### 私の愛をすべて

(2001年 アマリア・エスクリヴァ)

#### ウィンブルドンの段階

(2001年 マチュー・アマルリック)

#### 小さな勝利

(2002年 ジル・コーエン) ※短編

### 個人的な事件

(2002年 ギヨーム・ニクルー)

### セシル・カサール、17回

(2002年 クリストフ・オノレ)

### サルティンバンク

(2003年 ジャン＝クロード・ピエット)

### 素晴らしい約束の数々

(2003年 ジャン＝ポール・シヴェイラック)

### CODE46\*

(2003年 マイケル・ウィンターボトム)

### クリーン\*

(2004年 オリヴィエ・アサイヤス)

### 呪われた王

(2005年 ジョセ・ダヤン) ※TV 作品

### 何も変えてはならない

(2005年 ペドロ・コスタ) ※短編

### NOISE\*

(2006年 オリヴィエ・アサイヤス)

### Y 嬢

(2006年 エレーヌ・フィリエール)

### アゴスティノーと呼んでくれ

(2006年 クリステイノ・ロラン)

### 私はダンサーになりたかった

(2007年 アラン・バルリネール)

### ランジェ公爵夫人\*

(2007年 ジャック・リヴェット)

### サガン 悲しみよこんにちは\*

(2008年 ディアヌ・キュリス)

### 白痴

(2008年 ビエール・レオン)

### モノコから来た少女

(2008年 アンヌ・フォンテーヌ)

### 歌う喜び

(2008年 イラン・デュラン・コーエン)

### 女優の舞踏会

(2009年 メイウェン・ル・ヴェスコ)

### 村のパニック

(2009年 ステファーン・オービエ/ヴァンサン・パター) ※アニメ作品

### 姿を見せない女

(2009年 アガタ・ティシエール)

### 恋に焦がれる

(2009年 ジョセ・ダヤン) ※TV 作品

### 何も変えてはならない\*

(2009年 ペドロ・コスタ)

\*日本公開作品

私の作品はいつもそうなのですが、『何も変えてはならない』は、ひとつの出会いから生まれたものです。ジャンヌと私が出会ったのは、2003年のマルセイユ国際ドキュメンタリー映画祭でのことでした。

そこでいろんな話をしました……映画のこと、音楽のこと……。そして好きなものがいくつか共通していることがわかったのです。ルビッチ、ジョン・レノンとポール・マッカートニー、マリリン・モンローやレイ・デイヴィス、ヴェルヴェッツ……。当時ジャンヌは自身でいくつかの歌詞を手がけて、最初のアルバム『Paramour』を出したばかりでした。

このアルバムを私のところに届けてくれたのが友人の録音技師フィリップ・モレルで、「ジャンヌとなにか一緒にやるべきだ」と最初に言ってくれたのも彼でした。

はじめは迷いました……。音楽を巡る映画を制作するというのが、ちょっと怖かったです。しかし結局は作りたいという気持ちが上回りました。私は小型のDVカメラを、フィリップは録音機とマイクを手に、ジャンヌとその音楽活動のパートナーであるロドルフ・ビュルジェの演奏が行なわれているニオールへと出発したのです。映画の冒頭、「Torture」という曲のショットが最初に撮影したものです。私はすぐにジャンヌやロドルフ、その周りのミュージシャンと過ごす日々が気に入ってしまったのですが、それでもこれがまとまりのある映画として成立するという確信はまだ得られませんでした……。そして時が経ち、私は『コロッサル・ユース』を完成させ、ジャンヌはジャンヌでさまざまな映画や舞台に出演していたのですが、フィリップは病に倒れ、亡くなってしまいました。そんなある日、ジャンヌがセカンド・アルバムの準備を始めるつもりだと言ってきました。もう拒む理由はありません。私は仕事に乗り出して、少しずつ映画がかたちになっていったのです。

ジャンヌやロドルフ、それから一緒にいる他のミュージシャンたちも、ダニエル・ユイレやジャン＝マリー・ストローブに劣らず誠実なひとびとです。だから『あなたの微笑みはどこへ隠れたの?』と同様に、たんにアーティストの作業についてのドキュメンタリーというだけでない、その少し先に到達しうる映画を作りたい、私はそう思っていました。私が映画を作るときには、いつでもひとつの密やかな物語が隠れていて、それを把握し、できることなら馴致させなければならない、そしてそれはまずもって空間、時間、光や音でなされなければならないのです……。こういった秘密のあるところ、それがなんというか、一篇の小説のようなものになりうると信じているわけです。

ミュージシャンたちがこうした光のなか、夕闇に沈み暁の薄明に照らされるまでのあいだで作業をすすめ、なにかを案出しつつ試行錯誤していく様を眺めていると、森小屋に身を隠し、村から村へと逃避行を続ける4人組の行程が頭に浮かんでくるようです。ひとりの美女が歌を口ずさんで癒しを与え、その片隅には触れると切れんばかりに神経をとがらせた男、さらには思慮深く威厳を保った<首領>がいるというような……。そんな映画があるとして、その理想的なサウンドトラックであるかのようなジャンヌとロドルフの音楽に耳をそばだてれば、こんな旅立ちもありうるのかもしれない……。なにしろ私には、リハを開始しようとしたとたんに、かれらがフィクションに出てくる登場人物に成り変わってしまうように思えるのですから……。

『何も変えてはならない』は恋愛についての歌に満たされています……。ここに出てくる詩や歌詞、そしてそのあいだの沈黙までもが、激情ゆえの懊悩や愛の孤独がもたらす苦しみを綴ったものなのです。それはとても古くからある、しかし馴染み深い感情なのですが、私はそこに、これまで私自身がフィルムに収めてきた女性たちの物語を見出すこともできるように思えます。ジャンヌによれば「この映画が描く肖像には、わたしひとりのものよりずっと多くのものがある」と……。そう、肖像というのであれば、それは実在し、また実在しない複数の女性たちの肖像、あるいはもしかしたら私の心に宿り、映画の力、ジャンヌとその歌が捧げる秘儀を使って清められたたったひとりの女性の亡霊を描いたものなのかもしれません……。はたまた私自身がその亡霊ということもありえない話ではありませんよ……。

自分と同じ時間を過ごしてなにかを探求する人たちにひっそりと寄り添って、かれらに視線を投げかけるということが、私はほんとうに好きなのです。ヴァンダがある感情を、ヴェントウーラが思い出を、ダニエルとジャン＝マリーが微笑みを、そしてジャンヌがトーンや和音を求める姿を、私はそばで見つめていたのです。

わたしが音楽活動をしているのは、音楽を聴くのが大好きだし、歌うのも好きだからです。また、それはわたしが自分のお気に入りの女性ヴォーカルを聴いていると、同じことがしたくなるからでもあります。

ルイ・ジュヴェによると、俳優というものは、サル・プレイエルで演奏するハイフェッツを聴いて、耳をそちらに向けながらも自分が代わりに弾いているかのように想像してしまう、ちょっとおかしな人種なのです。こうした性向がわたしの音楽活動の支点、というより出発点となって、オペラやリート、マリリン・モンローにブロッサム・ディアリー、クルト・ヴァイル、歌も演技もこなすドイツの女優たち、アレサ・フランクリン、パティ・スミス、ブロンディ、ニコ、そしてモーリン・タッカーといったものを聴いてきたわけです。

わたしはまた、和音という観念が提起するものにも惹かれています。ひとつの和音、協和しあう複数の音を見つけること、騎士道精神あふれる申し出によって和解すること、他者とうまく調和すること、事物をそれ自身と一致させることがここで問題となっているのです。

思いつきですが、登場人物どうしの死を賭した戦いなしではすまされず、どうしたって演者に絶え間ない敵対関係を強いる映画や演劇とちがって、わたしの活動のなかでも音楽だけは、必ずしも対立を配さなくてもいいのではないのでしょうか。音楽にはユニゾンというものがありますし、またハーモニー、可能ならシンコペーション(緊張を緩和させるもうひとつのやりかたです)も使えるので、ここではひとびとが本当に手を取り合いつつ、肩を並べて歩いていけるように思えます。

わたしはそこに、あるひとつの自由の形態、それもまたひとつの闘争なのだと、敵対関係を経ることのない自由の形態を見ているのです。わたしがたえず音楽に求めているのは、放任されるということです。わたしが音楽をすることのなかには、[身を任せつつ自由であるという]ありそうもない放任の約束がつねに含まれているのです。もしかしたらそれは、子供が大人の愛情や視線、気配りに囲まれながら(音楽ではリズムやメロディ、ハーモニーがそれに当たります)母親の手を離し、漠たる世界へひとり歩き出す、そんな自由な精神、自由な身体のことなのかもしれません。

「水流にのったコルク栓のようだ」とは、たしかオーソン・ウェルズがジャンヌ・モローに別のことについて語った言葉です。変に思われるでしょうが、わたしはいつも、映画に出演するということは、自分が生まれたばかりの頃に戻るることなのだと思っていました。産着にくるまれ、服も髪も他人任せ、ずっとそばで見守られている、そんな状態だと。それに対して舞台上で演じるときには、はじめて言葉を発する喜びをおぼえた頃へと回帰しています。とすれば、歌うということはわたしにとって、最初に足を踏み出して歩いた興奮——話もできず、泳いだこともない頃の——を、物心がついたあともいつまでも辿り直している、そんな状態なのだと言えるのかもできません。

-ジャンヌ・バリバール 2009年4月26日

(フランス語版プレス・リリースより転載)

■ ジャンヌ・バリバールCD日本発売決定■

『何も変えてならない』の公開に先立ち、7月21日に1stアルバム『Paramour(パラムール)』(輸入盤)と2ndアルバム『Slalom Dame(スラローム・ダム)』(日本盤)が同時に発売開始。(発売元:P-VINE Records)

「苦しいわ」(『Paramour(パラムール)』より)

苦しいわ

苦しい日々

ベイビー あなたのせいよ

私の気持ちを知りながら

平気で放っておくのね

心がないの 見えないの?

私を苦しめてるのよ

こんなにも・・・

でも苦しくてもかまわない

あなたが私のものになるなら

愛してるなら そう言って

愛してないなら 解放して

苦しいわ

苦しい日々

ベイビー あなたのせいよ

なぜ私に 追わせるの?

なぜ捕まえても 受け止めてくれないの?

傷つきたいの 見えないの?

私を苦しめてるのよ

こんなにも・・・

ベイビー あなたのせいよ

## |関連情報|

### 【ペドロ・コスタ特集上映開催&監督来日予定】

『何も変えてはならない』公開に先立ちましてユーロスペースにて、ペドロ・コスタ監督特集上映(7月24日～30日)を開催いたします。開催に合わせてコスタ監督も来日予定です！

### 【ジャンヌ・バリバール 東京ライブ公演】

本作の公開を記念いたしまして、ジャンヌ・バリバールが伝説的ロック・バンド「カット・オノマ」のリーダー ロドルフ・ビュルジェとそのバンドをバックに一夜限りのライブが決定しました！

日時:2010年6月26日(土) 19:30～(open:19:00)

料金:¥3,000(前売)¥3,500(当日) \*ワンドリンク付  
¥2,800(東京日仏学院会員限定前売割引)

会場:スーパーデラックス(西麻布)

tel: 03-5412-0515港区西麻布 3-1-25 B1F

予約:[www.super-deluxe.com](http://www.super-deluxe.com)

[www.sdlx.jp](http://www.sdlx.jp) (携帯サイト)

主催:東京日仏学院

### 【東京日仏学院にてジャンヌ・バリバール特集】

バリバール来日に合わせまして、東京日仏学院 エスパス・イマージュにてジャンヌ・バリバールのレトロスペクティヴを行います。『何も変えてはならない』特別先行上映もあります。

寺島しのぶさん(6月27日)、大谷能生さん(6月25日)をお迎えしてバリバールとのトークイベントも決定しました。

日程:6月25日(金)～7月4日(日)

会場:東京日仏学院 2階エスパス・イマージュ

tel: 03-5206-2500

料金:一般 ¥1,000 日仏学院会員¥500

\* 当日の1回目上映の1時間前より、全ての回のチケットを販売。

開場は20分前。全席自由、整理番号順での入場。

\* 「何も変えてはならない」のみ一般1700円、会員1200円。

上映予定作品:『そして僕は恋をする』『恋ごころ』『ランジェ公爵夫人』『8月の終わり、9月の初め』『白痴』ほか

主催:東京日仏学院 [www.institut.jp](http://www.institut.jp)

2010年7月31日より  
ユーロスペースにて  
ロードショー決定！